

霊性にかんする協働組織—精神世界への新しい視座

伊藤耕一郎

はじめに

近年のパワースポット・宗教施設を対象とした研究は利用者の「浅い宗教的体験」や、提供者の「マーケティングやブランディング」(岡本 2020 : 39)といった「宗教ツーリズム」の視点で語られることが多い。

これに対し、精神世界研究からのアプローチは停滞気味にあるが(大道 2020 : 69)、精神世界がパワースポット・宗教施設と疎遠になったわけではない。

精神世界研究は、「日常性や合理性の向こうにある超越性や神秘の領域」を対象としている(島菌 2007b : 4)。精神世界には、「自己の存在を徹底して探求する人」と「内的経験をそこまで深く探求しない人」(門田 2013 : 343)が存在する。後者の人々は、困難な局面で解決の指針を得るため、また日常生活に疲れて癒しを必要と感じた時に、精神世界の技法や聖地などに関心を持つものの、それ以上の探求は行わない。筆者が研究対象としているのは前者である。そしてパワースポットは、依然として精神世界関係者にとって重要な場所なのである。

精神世界関係者は一般的に自己充足への志向が大変強く、奉仕による共同行為という理念を尊ばないとされ(島菌 1996 : 380)、利他主義を受け入れられない都合の良い自己愛的・誇大的な妄想に逃げ込む、偽りの霊性を求める人々だと評されることが多い(石川 2019 : 105-106)。門田岳久は、彼らと社会との間には「一見理解不能な懸隔が横たわっている」とも評している(門田 2013 : 343)。

しかし、筆者は、現地調査を続けていく中で、2017 年頃から廃神社寸前だった場所を「聖地として復興するため」、またそこを「維持・管理するため」、といった特定の目的のために、精神世界関係者が集まり、かつ地域社会からも受け入れられつつあるというケースを確認している。

なぜ「個人主義」、「共同行為という理念を尊ばない」と言われる彼らが、個人主義に留まらず集まって活動し、地域社会から受け入れられつつあるのか。本論文では近年の精神世界の動向をふまえた上で、現地調査結果を分析し、これらを明らかにしていきたい。

第 1 章 これまでの精神世界研究

(1) 狭義の精神世界について

1970 年代前半、日本ではオカルトや終末論がブームとなった(北川 2000:80-81)。このような中で、たま出版(1969 年創業)の創業者、瓜谷侑宏が、脱宗教を意味する意図で「精神世界」¹という言葉掲げたことが契機となって、書店に精神世界コーナーが設けられるようになり、「精神世界の本」のブックフェアが開催された(小笠原 2019:256)。

精神世界の興隆期の中心思想は、神智学をその源流としたニューエイジであった(ストーム 1993:23)。そこには、様々な霊的な思想が取り込まれており、檜尾直樹はこれをストームの言葉を用い、「霊的ごった煮」の継承だと表現している(檜尾 2010:75-76)。

「精神世界」には、幅広い利用者層が存在する。巡礼ツーリズムの利用者や、タロットやオーラ診断を楽しむ人々、そして魂の次元を上昇させて、宇宙意識との一体化を目指す人まで多くがその中に含まれる。

大田俊寛は、精神世界興隆期の中心思想が「霊的進化論」にあると論じている。これは前世でのカルマを今世での訓練を通して浄化し、転生を繰り返すことで、魂の霊的界層を上げ(魂のレベル上げ)、やがては宇宙意識(神的存在)と一体になることを目的とする思想である(大田 2013:45-55)。精神世界を深く追求していくと、霊的進化論を意識せざるを得ない。島菌進は、「この運動の目標を一言で言えば、自己自身の意識を高いレベルに変容させ『宇宙意識』に融合していくこと」だと述べている(島菌 1992:54-55)。

現代精神世界の中心行事である大規模ブース出展型イベントの創唱者である船井幸雄(船井幸雄)も、著書の中で魂のレベル上げを重視しており(船井 2005:31-42)、斉藤一人²をはじめとする多くの精神世界のリーダーと呼ばれる人々も、同様の内容

1 スピリチュアルと呼ばれることも多いが、本論文においては、引用を除き、書籍の分類等で使われている精神世界という用語を使用する。

2 サムハラ神社がパワースポット化するきっかけを作り、現代の精神世界に大きな影響を持つ事業家で、健康食品「まるかん」の販売のほか、精神世界の思想に基づく「商売繁盛や事業成功のハウトゥ本」を 150 冊以上出版。動画サイトには「魂のステージ」、「魂の成長」、「魂力を上げる」など精神世界関係の動画を 150 本以上アップしている。ま

を記している(光田 2010 : 46)。

また、大規模ブース出展型イベント「癒しフェア 2018 in 大阪」で筆者がとったアンケート「あなたは魂のレベルを意識したことがありますか」という設問では、42 人中「ある」と回答した人が 64%で、精神世界に関わる人は、何らかの形で魂のレベルを気にしている³。

魂のレベルを常に気につけ、霊的に進化しようとする人と、オーラ診断やタロット占いを楽しみに来ている人々との間には違いがある。同様に、パワースポットを巡っても両者を同じ線上で論じることはできない。スピリチュアルブーム、パワースポットブームにのり聖地に神聖な雰囲気を経験するために訪れる人(門田 2014 : 226-227)や主催者によって工夫されたツーリズムの上にいる人(門田 2013 : 103-124)と、自らの霊的進化(魂のレベル上げ)を目的にそこを訪れる人とは、意思決定・行動の過程において、明らかに違いがある。

そこで筆者は、島薺、樫尾らの学術研究者と当時の精神世界の代表者らの記事で構成された雑誌の特集の中で示されたチャートから⁴、パワースポット巡礼を含む、個々の技法や思想、及びその取得や実践のみに興味を持つ人々を「広義の精神世界関係者」、そして精神世界の中心思想を追求し、「霊的な進化をしていき、自己レベルを高レベルに変容させる」ため、魂のレベル上げを目的とする人々を、「狭義の精神世界関係者」と定義づけた(伊藤 2020 : 8-9)。

本論文における研究対象は後者であり、以降、本論文において「精神世界関係者」と記した場合は「狭義の精神世界関係者」を指す。

た、精神世界関係者としては唯一、12 年間連続で高額納税者として、ベスト 10 入りしている(光田 2010 : 39)。大杉神社を守る会の世話人 Y も同氏からの影響を受けている。

3 同イベント会場にいた 42 人に対して行った。設問項目は「性別」、「年代」、「あなたはニューエイジという言葉を知っていますか」、「あなたはニューエイジの意味について説明できますか(選択式)」、「あなたは年間どのくらい精神世界イベントに参加しますか」、「あなたは魂のレベルを意識したことはありますか」、「あなたは地球のアセンションは近いと思いますか」、「あなたはこのイベントの参加者ですか、出展者ですか」の 8 項目。設問 6 の「あなたは魂のレベルを意識したことはありますか」に対して、「ある」64%、「ない」21%、「分からない」14%、との回答を得ている。

4 「ニューエイジ VS スピリチュアル」『Star People for ascension Vol.29』ナチュラルスピリット、2009 年、28。

(2) 利他的精神世界関係者に関する理論構築

今回とりあげるサムハラ神社奥宮と大杉神社は、いわゆるパワースポットと呼ばれる場所である。堀江宗正は、「宗教的儀礼に参加しなくても、場所のパワーだけを切り取って、個人的に享受する」、「たとえば御神木のパワーを受け取ることが第一目的となりうる」(堀江 2019 : 226)と、パワースポット研究の視点から、精神世界関係者の利己性について分析をしている。

ところが注目すべきは、このような批判的な見方に対し、檜尾直樹は、「スピリチュアリティの定義を提示」するにあたり、その特徴の中に超越性、利他性を含めており、精神世界関係者の利他的行為についても指摘している点である(檜尾 2010 : 37-47)。

また、三木英も、精神世界関係者を、時代や社会に囚われている現状に覚醒し、自らを癒して本来の自己へと意識を進化させて、更には他者・自然・宇宙と調和することを望む人々だとした上で、同じテーマに価値を見いだした人々は単独に留まることなく相互につながるとして、これを「スピリチュアリティ探求者群」と名付けた(三木 2014 : 46-47)。

とはいえ、これまで三木の示したような精神世界関係者らは表に出て来ておらず、三木も「現在どれほどのスピリチュアリティ探求者群が国内に活動するのか、それを確認することは一この『集団』の性格上一極めて難しい」(三木 2014 : 47)としており、精神世界関係者が利他性を持って集まることについては、既に先行研究において議論されていたものの、筆者の知る限り、実質的な検証はできていなかった。

(3) 霊性にかかわる協働組織

今回、筆者が、調査を行ったのは、岡山県津山市の「一般社団法人たまや」(世話人 X)と、滋賀県彦根市の「大杉神社を守る会」(世話人 Y とその妻 Z)である。たまやに関しては 2018 年 10 月より、大杉神社を守る会に関しては 2019 年 7 月より現地調査を開始し、現在も継続調査中である。

どちらにも世話人は存在するが、主として案内人や連絡系の役割を担っており、強力なリーダーシップによって運営がなされているわけではない。また、両者とも、その活動が、地域社会から受け入れられつつあるという特徴を持つ。

両組織を構成する人々が集まってくる当初の目的は「個人の思想・技法・魂の浄化」であっても、そこには「その神社を参拝する人たちが気持ちよく参拝できるようにし

ておきたい(たまや)」、「そこへたどり着くための道を誰もが利用できるように整備しておきたい(大杉神社を守る会)」といった個人を超えた目的(他者に対する思い)が育ちつつある。この点で彼らは「個人主義で共同行為という理念を尊ばない」人々とは違っており、筆者はこの態様からこれらの人々の集まりを「霊性にかかわる協働組織」と呼称することにした。

第 2 章 霊性にかかわる協働組織

今回筆者は、精神世界関係者が、どのように協働組織となり、どのような活動を行っているかについて明らかにするため、現地調査を行った⁵。

(1) 世話人について

1 一般社団法人たまや 世話人 X

X(50代 女性)は、岡山県津山市加茂町に住んで 50 年、生家は造り醤油屋で、たまやの名称はそこに由来する。一時期は中学の教員として岡山市に出ていたが、数年後に加茂町に戻って来て、暫くの間、自宅で塾を開いていた。

特に霊体験は無かったが、子供の頃から金刀比羅神社境内にあるサムハラ神社に親近感を覚えており、「自分の神様」として参拝を欠かすことはなかった。通学時も、遠回りをして参拝してから学校に行ったり、犬の散歩に行く際も必ず一旦は立ち寄って参拝をしていたという。

子供の頃から正義感が強く、曲がったことが大嫌いで、自分と無関係であっても、いじめやサボリなどの不正を見ると介入し、大事になることもあった。そのような性格であったため、特に神社の訪問者のマナーが低下していることには、人一倍怒りを感じていたようである。

⁵ 現地調査記事について。

「関西大学大学院文学研究科院生協議会 学術調査に関するガイドライン及び倫理規程」(<https://drive.google.com/file/d/1efuUvwTSlKv5XyENqq7mcxya9tD50W1x/view?usp=sharing>)に従いチェックし、調査内容を記載した。個人名については基本匿名とし、参考文献の著者や中に記されている人物についてはそのまま記した。

齒に衣を着せぬもの言いで、参拝作法が違ったり、マナーが悪い訪問者に直接注意を行うなど、一部からは疎ましく思われることもあるが、本人は一向に意に介してはいない。

2 大杉神社を守る会 世話人 Y

Y(50代 男性)は、彦根市内にある仏具店の店主で、2001年に父から店を引き継いだ。若い頃から自転車を趣味としており、トライアスロンの選手として大会に出場したこともあった。トレーニングとして滋賀県と三重県の山脈の間を走ることもあり、その頃から霊場とされる場所を走る度に何かを感じるようになった。そこから「聖地」に興味を持つようになり、大杉神社の付近にある比婆神社を、自らの霊場として定期的に訪れるようになったという。別の調査報告(岡崎 2018:30)では店の顧客から「商売繁盛に良い」と紹介されて、20年以上参拝しているということであったが、筆者の聞き取り時には、商売繁盛のくだりには触れられなかった。

Yの生家は代々浄土真宗本願寺派の檀家で、聖地というものに対する崇敬の念はあっても、精神世界そのものに対する興味もなければ、造詣が深いということもなかった。信念が強く、奉仕活動として、神社とそこに通じる林道の、定期的な清掃整備を欠かすことはなく、これを自分の使命と考えている。

(2)両神社について

1 サムハラ神社奥宮(岡山県津山市加茂町中原)

サムハラ神社といえば、「持ち主の身を守る指輪」で有名になった大阪市のサムハラ神社を指すことが多い。本論文で取り上げる「サムハラ神社奥宮」(写真1)は、津山市観光協会によれば、大阪市のサムハラ神社の建立者である田中富三郎(1868年生)が、津山市加茂町出身で、ここを熱心に信仰していたことから、サムハラ神社の奥宮として扱われるようになった。しかし、津山市のサムハラ神社が奥宮と呼ばれ始めたのはここ4、5年のことで、事実関係については不明な点が多い⁶。

サムハラ神社奥宮は、加茂町にある金刀比羅神社の敷地内にあり、ここに祀られる

6 奥宮管理者 K(70代 男性)への聞き取りにもとづく(2020年8月7日)。

サムハラ大神は、宇宙の森羅万象を創造したといわれる「天御中主大神・高御産巢日大神・神産巢日大神」(造化三神)の総称であるが、精神世界関係者の間ではなぜか「サムハラ龍王と呼ばれる天之叢雲、九鬼武産龍王が祀られ、覚醒の波動をもたらす」と紹介されている⁷。

たまやの会員 A(40代女性)によれば、2004年に現在の場所に移築され、2010年頃に斉藤一人がここを参拝してから、口コミで徐々に精神世界関係者の訪問者が増え始め、2014年頃からはブログで、「ピラミッドと時空が繋がった」、「宇宙語が話せるようになった」と紹介されたり、「エジプトのエネルギーを受け取ることができる場所」とも言われており、境内の聖域(写真2)の地下はシャンバラ⁸に通じているという。

Xによれば、この神社の参拝の仕方は他の神社の二礼二拍手一礼とは違い、三礼三拍手一礼が正しく、そうでなければ参拝したことにならず、また、参拝の後の1ヶ月以内に願い事がかなえられたか否かにかかわらず、お礼の参拝に来なければ2度と耳を傾けて貰えなくなるということだった。



写真1 筆者が撮影



写真2 筆者が撮影

2 大杉神社(滋賀県彦根市武奈町)

大杉神社を守る会は、30年前に過疎化が進み、無人となった滋賀県彦根市武奈町に

7 『ゆほびか GOLD vol.43』(マキノ出版 2019 49-52)。

8 精神世界では「地下帝国」を指すことが多く、エネルギーを注ぐと、地場が安定するという。

ある。元町民らによって、神社の維持・祭祀のために設立された「大杉神社奉賛会」が前身となっており、奉賛会が作成した現在の由緒書には、「大杉龍宮」と「北原龍宮」(総称「大杉龍王」)が祀られていると記されているが、もともと祀られていたのは同地の鎮守神であったという(岡崎 2018 : 6・28)。

2008 年に WEB サイトが開設されはじめてからは⁹、「大杉龍王・北原龍宮」は神社仏閣マニアの間で話題になりはじめた。また、神社の整備が進んだ 2010 年以降は「隠れた聖地」として多くのブログ開設がなされている¹⁰。

2014 年に Y が聖地ツアーをはじめると、利用者の中に精神世界関係者が混じりはじめるようになった(岡崎 2018 : 6・28)。2018 年に当時の Y の師が亡くなった頃から、ツアーの参加者の層の大半が精神世界関係者となり、2019 年以降、大杉神社には「大杉龍王」が祀られている聖地としてだけでなく、「金星のエネルギーが降り注ぐ場所」、「UFO の着陸場所」として多くの精神世界関係者が訪れている¹¹。

Y によると、参拝対象は神社の御神木そのものであり(写真 3)、降り注ぐエネルギーは、多くの神々や精霊を癒すとされ、他の神社の神々がやってきては、ここで休んでいるという。また、神社の奥の磐座群(写真 4)は UFO の着陸地点とされ、見えない結界のため、その場に選ばれた者しか入れないということであった。



写真 3 筆者が撮影



写真 4 筆者が撮影

9 IP ドメイン SEARCH 調べ (<https://www.ip-domain-search.com/cgi-bin/lipsearch.cgi>)2019 年 7 月 6 日閲覧。

10 Google Chrome ツール(期間を絞って検索)による調査。

11 大杉神社を守る会会員 B(20 代 男性)への聞き取りにもとづく(2020 年 2 月 11 日)。

(3)協働組織の成り立ちと活動

1 一般社団法人たまや

サムハラ神社がパワースポットとしてネットで取り上げられることが多くなって以来、訪問者のマナーの悪さが目についていた。観光客が持ち込んだゴミがそのまま放置され、神社に常駐管理者がいないため、環境整備に手が回らないことや、施設の老朽化などが問題になっていた。この現状に対し X が、パワースポット探索で何度もこの地を訪れていた精神世界サロン¹²経営者の A に声をかけたところ、A もこの現状を憂いており、「具体的にこの場所を守る活動をする必要がある」という話になった。

A はもともと東京都でサロンを経営していたが、霊障のような症状で体調を崩し、守護霊に、「都心部の邪気を吸収しすぎなので、空気の良いところで自身を浄化してくるように」と告げられたという。その際、夢の中で山中の神社が浮かび、そこがサムハラ神社であると分かったので、津山市に引っ越してきたという。それから A は、サムハラ神社へ通うことが日課になり、体調は回復へ向かったが、サムハラ神社には特別な参拝の仕方があるということを耳にし、それを知りたいとずっと思っていたと言う。

X と会うことによって、X からサムハラ神社について参拝の仕方などを教えられた A は、インターネットで精神世界関係者に神社の情報と現状を伝え、保護活動への協力を呼びかけた。この呼びかけへの反応は大きく、60 名を超える賛同者が集まり、2016 年 11 月に「たまやファンクラブ」が結成された。

会員は日程を決めて神社の清掃や整備、補修のためのボランティアを行い、支援金も募った。支援金が一定額以上集まったため、会員の提案で 2017 年 11 月 22 日、一般社団法人として登記がなされた。

2018 年の西日本豪雨では、この協働組織のクラウドファンディングによって、倒壊した施設の修繕のための費用の大半が拠出されている。

一方、「浄化による高波動との縁を結ぶ集い」、「エジプトのエネルギーを受けるためのエネルギーワーク」、「宇宙のゲートを開くための講習」などの精神世界の思想にもとづくイベントも定期的に行われている。

最初の対面調査で X は、「自分が好きなのは神様ごと¹³、神社の案内と正しい参

12 利用者に精神世界の技法を行ったり、精神世界関係のグッズ物販を行う事業所。

13 Y は「神様ごとは神社だけでなく自宅や身近なところに神を降ろし、そのエネルギーを

拝の仕方を教えることが自分の役目」だとしており、「チャネリングやエネルギーワーク¹⁴、ヒーリングなどを教える役割は A やその関係者にある」としていた。

たまやでは、複数回参拝に来ており、サムハラ神社をなんらかの形で支えていこうという志を持っていることが入会条件となっており、入会後は独自の連絡網に登録される。

2 大杉神社を守る会

Y が大杉神社奉賛会を受け継いだ 2006 年には、奉賛会の中に彦根市武奈町の関係者はほとんどいなくなっていた。Y は、2009 年に Z(40 代 女性)と結婚、Z は、斉藤一人の弟子で精神世界指導者でもある高津りえの公認スピリチュアル・カウンセラーで、斉藤一人のサプリメント「まるかん」、及び書籍の販売代理店を営んでおり、自身もレイキ(ヒーリングの一種)の施術ができたという¹⁵。

2014 年に聖地ツアーをはじめた当初は、「天照皇大御神から、生命誕生の仕組みを知らされた 3 人の神職のうちの 1 人」と自称する加古藤市(故人 男性)を Y は師と仰いでおり、加古の行う説法を目的に集まってくる人が多かった。奉賛会への加古の影響力は大きく、大杉神社の神器や境内の旗、由緒書の写真にも書かれている六芒星は、同神社のシンボルになっており、のぼりも立てられている(写真 5)。しかし、これは本来の大杉神社のものではなく、加古が説法の中で六芒星について盛んに説いていたことに起因するようである(岡崎 2018 : 6・28)。「大杉神社を守る会」という名称が使われはじめたのは 2017 年頃ということだが、この時期には奉賛会の名前も使用されており¹⁶、「大杉神社を守る会」として新規スタートしたのは、ツアーのコースを変更した 2018 年からのようで(2020 年 2 月 11 日 B への聞き取り)、翌年には奉賛会

得て、神を内側に感じて感謝して生きること」としており(2019 年 7 月 1 日 Y への聞き取り)、X は自分のサロンの神棚にサムハラ神社の分霊を引き入れ、「いつでも神の力を感じ感謝して生きることが大切だ」としている(2018 年 10 月 9 日 X への聞き取り)。この両者の説明から筆者は、彼らの言う「神様ごと」を「身近な諸々の現象を神からの通信として受け取り、常に神を感じる生き方」として解釈している。

14 チャネリングは高次の存在からのメッセージなどを受け取る技法。エネルギーワークは潜在的な自分の力を引き出して、操作するための訓練。

15 B への聞き取りにもとづく(2020 年 2 月 11 日)。

16 岡崎梓織への聞き取りにもとづく(2019 年 7 月 1 日)。

が設置していた祠と鳥居(写真 6)が撤去されている(2019 年 7 月 1 日現地調査)。

たまやと違い、彦根市武奈町付近の神社が、あまり気にとめられていないこともあり、この協働組織について知る人は少ない。しかし、大杉神社付近を中心とした植樹活動や神社の清掃、神社までの林道上にある土砂の崩落石・枯れ葉を、毎月清掃整備するなど、活動は広範囲に渡り、「神社のために何かしたい」という賛同者が参加し始め、Y が奉賛会の代表を引き継いだときに会員数は 10 人以下だったが(岡崎 2018 : 30)、現在は 30 人を超えているという¹⁷。

大杉神社を守る会では、神社への奉仕活動に定期的に参加し、自主的に大杉神社のために奉仕をしようとする人を会員として認めている。



写真 5 筆者が撮影

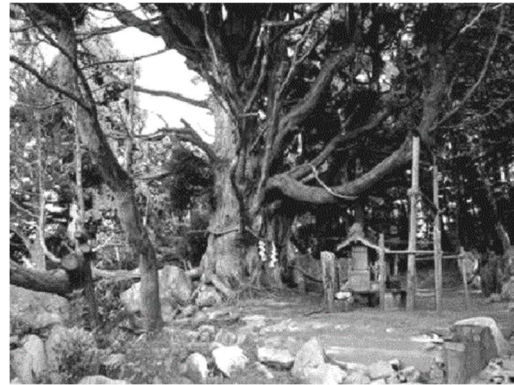


写真 6 写真提供 岡崎梓織

(4)世話人の変化

1 X の変化

たまやの設立当初、世話人の X は、会員がイベントを提案すると、場所とスケジュールを合わせて開催ができるようにする調整役であった。

会員からの提案で、意識物理学者の半田広宣¹⁸を招いて、サムハラ神社とエジプトのピラミッドパワーとの関連に関する「宇宙集会—サムハラ神社御祭神の造化三神」

¹⁷ Y への聞き取りにもとづく(2019 年 7 月 1 日)。

¹⁸ 株式会社ヌースコーポレーション代表取締役。武蔵野学院大学スペシャルアカデミックフェロー。冥王星のオコット(宇宙人)から超越情報を得たとされている。

と題した講演会と参拝がセットになったイベントが開催された際も X は調整役に徹していた(2019年3月24日現地調査)。

この日には、岡山、愛媛、京都、滋賀から、約 80 人の精神世界関係者がこのイベントに参加していたが、X は前面に出ることなく淡々と会場側との打ち合わせ等を行っていた。

しかし、それから半年も経たないうちに X に変化が現れていた。半田の影響があったともいわれているが¹⁹、これまでは単に神社参拝のための案内をしていた X は、精神世界の技法や思想についての見識を有するようになり、筆者が有志と訪問した際には(2019年6月15日現地調査)、独自の参拝ルートを作成し(図 1)、参加者に聖域手前で、手のひらを上にして両手を上にあげて、一定時間経過後に今度は手のひらを地面に向けながら手を下ろす動作を教えた。これはエネルギーを吸ってシャンバラに落とす動作だということだった。また、サムハラ神社境内での参拝後には、神社裏手で両腕を上げてエジプトのエネルギーを吸収する動作をするように促した。境内を一周して戻ると、X が宇宙から受けた言葉を 1 人 1 人に告げて案内は終了となった。この一連の流れは、2020 年には若干変化しているが(2020年9月12日現地調査)、定型化されている。

参拝の際に X は祝詞のようなものを唱えていたが、サムハラ神社に一番ふさわしい祝詞を、高次元から受け取ったということであった(2019年6月15日 X からの聞き取り)。

また前述のイベントが行われた頃に、X は自宅の離れにサロンを作っており、中には X の夫(60代)がサロンの横の工房で作っているオルゴナイト²⁰や、多くの不思議写真²¹、「綿棒ピラミッド」²²が置いてあり、X によるゼロ磁場²³を作るためのワークショップが行われていた。精神世界の思想やゼロ磁場のワークの仕方を説明する時の X は、調整役・案内人というよりは、精神世界の講師のようであった。

19 A への聞き取りにもとづく(2020年5月16日)。

20 天然石や金属片などを配列し、レジン樹脂で様々な形に固めたもので、ポジティブなエネルギーを発したり、場を浄化したりする。

21 神社の聖域で撮れる「宇宙へのゲート」と呼ばれる、様々な形や色の光が写った写真。

22 「宇宙のエネルギーをサロンに誘導することができる」という、綿棒で組み立てられた高さ 30 センチほどのピラミッド。

23 磁力が存在しない全ての均衡が取れた、命を育む場所といわれる。

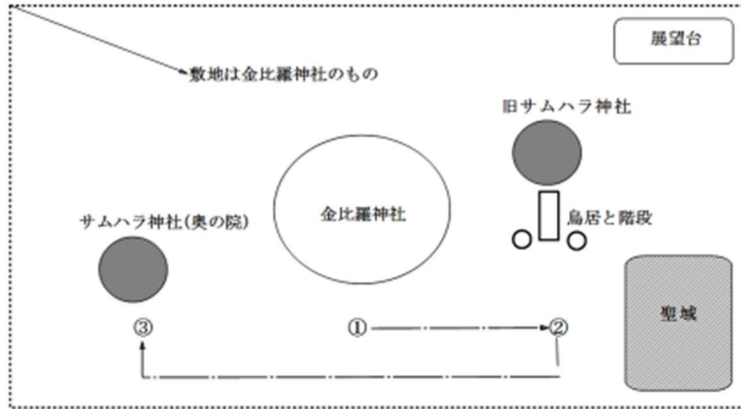


図 1 筆者が作成

2 Y の変化

Y にも同様の変化が見られる。2018 年の時点では、Z がスピリチュアル・カウンセリングやレイキ、斉藤一人のサプリメントや書籍の代理店を営んでいたものの²⁴、Y 自身は、「神様ごと」が好きで精神世界についての知識を特に有していなかった。

しかし、2019 年に加古が他界してから Y は、はせくらみゆき²⁵に師事し、精神世界を濃くしていった。店舗の 2 階には Y のサロンがつくられており、エネルギーを引き込むための「綿棒ピラミッド」をはじめ、たまやのサロンの中にあったものは一通り揃っていた。筆者の聞き取り時には、「現在はアセンション²⁶をして 5 次元だが、最高 13 次元が大杉神社の御神木には現れている」、「今の世の中を浄化するために、大杉神社に降ってくる金星エネルギーを受けて、それを地下のシャンバラに流し込む必要がある」という話や、斉藤一人の「言葉の波動」についての解説など、「神様ごと」という言葉は使用されるものの、話の大半は精神世界に関する内容と同じであった。

また、2018 年までの訪問者のブログ等に写っていた祠や鳥居が撤去されたことについて、Y は「本来大杉神社のご神体は御神木そのもので、ここに龍神さんが住んでいる。金星のエネルギーが降りてくるこの場所には、他の神社の神様も休みに来る。

24 B への聞き取りにもとづく(2020 年 2 月 11 日)。

25 ミラクルアーティストと呼ばれる精神世界のカリスマ的存在。

26 地球が次元上昇して新しい次元に突入するという精神世界の通説。

祠や鳥居は邪魔なので撤去した」ということだった。しかし、Y の父親(70 代)によると、「祠も鳥居も老朽化して、放置しておく危険なので撤去したと聞いている」とのこと(2020 年 4 月 8 日 Y の父親への聞き取り)、会員の話では、奉賛会のメンバーが内部にいなくなった時期を見計らって、組織の再スタートとして祠や鳥居の撤去を行ったのではないかとのことだった(2020 年 4 月 6 日 B への聞き取り)。

2019 年の現地調査では Y のサロンでは、大地の浄化のために、大杉神社から店舗に引き込んだ金星のエネルギーをシャンバラに落とすためのエネルギーワークが行われた。これは X が、サムハラ神社の聖域で教えていたものと同様のものであった。この際、Y は金星から受け取ったという特別な祝詞をあげていた²⁷。

2019 年には Z が共同代表に就任し、2020 年にはさらに精神世界色を深めて、2 人でヒーリングの出張に出かけるようになっている²⁸。店舗の一階では、斉藤一人の本や、癒しの絵、精神世界の関連書籍やグッズが販売されるようになり、店舗全体が精神世界関連事業所ようになっていた。

奉賛会が神社のシンボルとした六芒星は、Y の再解釈を加えて引き続き使用されており、大杉神社と店舗・サロンを繋ぐためのツールとして店舗・サロンの各所に配置されていた。この六芒星についての Y の解釈は、「基本的に六芒星はエネルギーを吸収する形であるが、エネルギーを吸収しすぎるため、円でこれを囲む必要がある」、「囲まないで置くと余剰エネルギーを周囲にぶつけ始める」ということで、Y は、「円で囲むことにより、吸収したエネルギーが融和のエネルギーに変わる」、「イスラエルに争いが絶えないのは(六芒星を)円で囲んでいないためである」と六芒星を円で囲む重要性を説いており、Y や会員が着用している作務衣の背中にある六芒星も円で囲まれていた(2020 年 8 月 11 日現地調査)。

後日の現地調査では、境内に立てられていた六芒星の描かれたのぼりが撤去されていた(2020 年 4 月 8 日現地調査)。Y によると、「一度風雨でボロボロになったので外した、今は日本の危機のため、考える時期ではない」とのことであった(2020 年 8 月 11 日 Y への聞き取り)。

(6)最新の現地調査から

2020 年の 8 月以降に、両協働組織が現在どう運営されているか、実情を把握する

27 現地調査(2019 年 7 月 1 日)。

28 Y の父親への聞き取りにもとづく(2020 年 4 月 8 日)。

ため、規模の大きなイベントに参加し調査を行った。

1 たまや「全倍音・シンギング・リンセラピーとサムハラ参拝」2020年9月12日

たまやのイベントは、設立時より「<参拝>+<精神世界関連セミナー>」という形で行われてきた。順序としては参拝が先で、サムハラ神社の案内・参拝が終わった後に、昼食と休憩をはさみ、その後にセミナーが行われるという順序だった。しかし、この日のイベントは、順序が逆で、セミナーが先に行われた。2020年の春以降に、たまやのイベントに参加した会員によると、「体験型のワークショップが多くなってからは、参拝が後半になることが増えた」ということであった²⁹。

今回、調査を行った、「全倍音・シンギング・リンセラピーとサムハラ参拝」では、一般社団法人シンギング・リン協会の代表 D(50代 女性)と、そのインストラクターらが来ており、シンギング・リンという楽器を使ったワークショップが行われた。この日の参加者は約 20人で、たまやの会員が約半数、初参加者が半数だった。初参加者は、たまやの会員から誘われたか、Dの関連 WEB ページでイベントを知ったようであった。

シンギング・リンは、2004年に臨床心理士であった Dが医学関係者や音楽療法家の協力を得て開発されたもので、同形状楽器のシンギングボールやクリスタルボールとは違い、銅とケイ素を中心としたオリジナルの合金で作られており、日本の職人によるハンドメイドで、全てにナンバリングが施されている。長期の保証が付けられているが、発売以降 17年間、これまでに破損した報告は 1件もないという(2020年9月12日 Dへの聞き取り)。

Dは、シンギング・リンによってもたらされる効果について「音響を魂レベルで勉強できるので、宇宙が分かるようになり、どう叩いて音を出すかで、理解できる宇宙の側面も変わってくる」、「製造された全てのシンギング・リンは互いに共鳴する。つまり、1つのシンギング・リンを鳴らせば世界中のシンギング・リンが鳴るので、1打を打った人の心が世界に広がり、融和と愛をもたらすことができる」、「シンギング・リンの1打は、細胞と共鳴する。これはコンサートに行った際に気持ちよくなる体験と同じである」、「人間は楽器と同じで、身体の色々な場所の調律が狂ってくるが、シンギング・リンの響きは自然治癒力を上げ、正常な状態にする調律師でもある」、

29 たまや会員 C(40代 女性)への聞き取りにもとづく(2020年9月12日)。

「響きは、肉体のマッサージとは違い、血流だけでなく、場の気流もよくなってくる。通常であれば人が集まりすぎて気分が悪くなる場所でも浄化され、気分が良くなる」、「一番よい宇宙と融合された状態に、チューニングしていくことができるので、家庭も円満になる」、「水を入れるとエネルギーが形になり、波動水ができる。あらゆる細胞に共鳴するので、音を聴かせると味が変わる」、「これからの社会の変化は変えることができない。だからこそ身体のカンニングが必要である」など、さまざまな話をしていった。

解説の後、D は話した内容について参加者ができる限り体感できるように、持参した体験用のシンギング・リンを参加者に渡して、インストラクターが叩き方や使い方のアドバイスをを行い、それぞれが演奏体験を行った。叩き方による「宇宙(とされる何か)と繋がっている感覚」、「シンギング・リンの中に入れた水と、そうでない水との飲み比べ」、「疲れている人へ音の振動を送り、身体を調律する」など、参加者の大半がシンギング・リンの効果を体感できたようだった。

昼食後には「音浴体験」が行われた。これは、セミナー後にサムハラ神社の参拝に行くにあたり身体を浄化する目的も兼ねており、約 20 人分の布団が敷かれた場所で参加者が横になり、その側で D とインストラクターがシンギング・リンを癒しと浄化の周波数で演奏するものである。「寝ている間に浄化される」ということだったので、筆者は、自分は寝ないで状況を確認しようと考えていたが、筆者は気付くと眠っていた。

音浴を終え、全員でサムハラ神社へと移動し、図 1 の順路で参拝を行ったが、これまでと違いがあった。聖域前のエネルギーワークで、エネルギーを受けてシャンバラへ落とすという所作はこれまでも行われていたが、X は初参加者の中から何人かを指名し、本当にエネルギーを受け取れているかどうか、すなわち「体感できているか」どうかを確認し、体感できるようになるまで、会員らがこれをサポートしていた。

サムハラ神社の境内では、音によるエネルギーワークとして、サムハラ神社に降り注いで境内下に蓄積されたエネルギーの音による取り出しが行われた。このエネルギーを取り出すワークでは、参加者が境内に手を差し出して、場の空気を確認した。D がシンギング・リンを演奏し始め、エネルギーが境内に放出し始めたと判断すると、X は参加者に対し、もう一度境内に手を伸ばして熱を体感できたかを確認させ、全員が熱を体感できるまで D はその場で演奏を続けた。

たまやでは、これまで通り、「神社の清掃や施設の修繕・維持活動」、「神社の案内」と「精神世界に関するイベント」を中心に活動している。しかし、筆者が参加したイベント以前にも「霊魂の分離」、「空中浮遊」などの体験会が行われており(2020 年 4 月 9 日 X への聞き取り)、「案内」や「イベント」に関しては、実際に「体験する」、「体感する」ことに、重点が置かれるようになっているようだった。

2 大杉神社を守る会 大祭 2020 年 8 月 11 日

同日 9 時頃から Y の店舗前に人々が集まりはじめ、店舗内に入っていった。筆者も入店したが、店内はさらに精神世界色が濃くなっており、パワーストーンを始めとした様々なグッズが販売されていた。

陳列棚も増えており、五角形をかたどった商品が目についた。Y によると、五角形はエネルギー的に身体に良いため、店内にいるだけでも癒されるように、五角形をかたどった商品と専用の展示棚を作ったということであった。

特に大きな宣伝をしていなかったこともあり、参加者は 15 人前後で(途中参加者や途中で帰った者もいたため正確には把握できなかった)、初参加者は 4 人だった。そのうちの 1 人に参加の経緯を聞いたところ、「前から大杉神社が気になっていたが、行き方が分からなかった。それを同僚に話したところ Y を紹介してもらった」ということだった。

今回のイベントに来ていた参加者の中には、個性的な会員が何人かいた。ヒーリング・ハーブ奏者の E(40 代 女性)や、磐座から放出された霊気を読み取れる磐座学会の会員 F(70 代 男性)、鹿皮太鼓の奏者 G(50 代 男性)、精神世界関係商品製造業者 I(50 代 男性)など、普段のイベントでは同時に見かけることがない人々が揃っていた。

大杉神社へ向かう車内で Y は、大杉神社へ参拝している者には、金星のエネルギーや龍神が発する浄化エネルギーが働くので、疫病は無効化するなど、社会事情にも独自の見解を示し、様々な話をしていたが、これについては本論文趣旨から外れるために割愛する。

大祭は神道行事のような形で始められた。御神木に向かって並べられた机には酒・米・塩・小豆・榊・昆布・イカの干物・ろうそくが並べられていた。Y は、木札に名前と願い事を書いた後に、これらを机に供えるようにと促していた。

Y は大祭が始まる前に、全体の流れと独自の参拝方法を教えたが、通常の 2 礼 2 拍手 1 礼は、「GHQ が、神国日本の神の力を発揮させないために日本に浸透させた参拝方法であるため間違っている。本来正しいのは 3 礼 3 拍手 1 礼である」と説明していた。これはサムハラ神社と同じ参拝の仕方であり、精神世界関係者が関わる神社ではこの 3 礼 3 拍手 1 礼が推奨されることが多いようである³⁰。また、開会にあたって歌

30 2020 年の夏から調査をはじめた越木岩神社を中心に活動する霊性にかかわる協働組

った国歌の歌詞も「君が代」ではなく「我が君」が正しいとされ、訂正された歌詞が配られた。たまやでは確認できなかったが、儀式的なものに関しては、神社を中心に活動する協働組織では、共通認識のようなものがあるらしい³¹。

その後に参加者が一人ずつ玉串を奉納することになったが、この際 Y から各自に、両手を上にかざし金星のエネルギーを吸い込み、そのまま地下のシャンバラへと落すように指示がなされた。この所作は、前回訪れた際にも行っているが、今回は I が、「せっかく来たのだから、エネルギーが感じ取れない人は言って下さいね、形だけだと勿体ないから」とエネルギーを吸収していることが分かるようになるまで、何度も奉納の練習に付き合っていた。初参加の 4 人だけでなく会員でも 3 人ほど I からのレクチャーを受けており、奉納後に、筆者が「どうでしたか」と 3 人に聞いたところ、「練習させてもらった後で奉納したら、手を上にあげた途端に一瞬何か、ずしっとするようなものが両腕に乗かって、それがスルッと身体に入っていく感じがした」、「シャンバラをイメージしてそれを落とすようにすると、今度は手からそれが土の中に入っていくと同時に、地球からの熱を感じた」ということだった。

玉串の奉納までは、神道行事に近いものを感じたが、そこから先は精神世界的な色合いが濃くなっていった。玉串の奉納後、はせくらみゆきから Z が直接学んだ舞が奉納された。その際 I から、小さな六芒星が埋め込まれたシールが参加者に配られ、額にはることを勧められた。シールに埋め込まれた六芒星がエネルギーを吸収し、自動的にエネルギーを身体に入れることができるため、金星のエネルギーを体感するためには、ちょうど良いということだった。

シールを配られた数名がこれを額に貼った後に、Z の舞の奉納が始まったが、シールを額にはった 1 人が、「Z が何かを御神木に願い、降ろしてくるような動作をする度に額がズキズキする」と言うので、その旨を I に伝えると「もともと感じやすい人には、これ(シール)は逆効果なので外すようにしてください」ということだった(2020 年 8 月 11 日 I への聞き取り)。舞が終わった後に、シールをはっていた人に何かを感じたかどうかを聞いたところ「力強い暖かさを感じた」、「矢が頭に突き刺さった後に、溶けて脳内を癒してくれるような感覚だった」など、感想は人それぞれだったが、何かを体感したようではあった。

昼食後、境内の中に設置された六芒星をかたどった焚き火台の上で、「お焚き上げ」が行われた。Y が説明する大祭で重要な要素は「ひ・ふ・み」の 3 つで、それぞれ「火・

織、「禊カフェ」でも 3 礼 3 拍手 1 礼での参拝を推奨している(現地調査、2020 年 8 月 8 日)。

31 禊カフェ会員(60 代 男性)への聞き取りにもとづく(2020 年 9 月 5 日)。

風・水」を表すという。このお炊き上げは最初の要素である火であり、燃やすものは先述した願い事を書いた木札と、Y の知り合いの書道教室の生徒が書き溜めた半紙で、火の中にそれらを投入する際には、「ありがとう」と言いながら投入するようということだった³²。また、Y は、お焚き上げの火は写真に撮ると「その人だけの龍」が写るから積極的に撮影するようにといい、様々な角度からの写真の撮り方をアドバイスしていた。

G は、炎の中に何か投入される度に、鹿皮太鼓を鳴らしており、一通りの投入が終わると、参加者に鹿皮太鼓を叩くことを勧めていた。G が言うには、鹿皮太鼓の音は、炎の力を強くし、投入されたものを完全燃焼させ、投入した木札に書いた願い事を引き寄せるということであつた。また、何度も太鼓を打っていると、風の妖精がやってくるのが耳元で聞こえることがあるので、「ありがとう」と挨拶をすると良いとしていた。

火が弱まるまで、参加者は叩き方を教えてもらい、鹿皮太鼓を叩くか、「自分だけの龍」を撮ろうとしていた。数人が、「ありがとう」と挨拶をしており、G は、「何人かは本当に風の精霊の体験をしているはずだ」と言っていた。

炎の勢いが一番弱くなってきた頃に、E がヒーリング・ハーブをもって御神木の上にある磐座へ行き水の精を呼び出すというので、これに同行した。E が弾く旋律は、特に曲になっているわけではなく、どちらかと言うと、響鳴を起こすことに主眼が置かれているようであつた。E は、ときどき演奏を止めて、見えない何かに向かって手を振っていた。E が言うには「楽器の音を気に入ってくれた水の妖精が、疲れを癒してくれている」ということで、妖精や生命エネルギーが多いところでこそ、ヒーリング・ハーブは真価を発揮するということだった。E は「下手でも自分で奏でた方が効果を体感できる」とし、希望者にヒーリング・ハーブの弾き方を教えていた。

大杉神社での儀式を終えて、車両に乗り込んだところ Y ではなく、F が乗り込んだ車が先頭に行くので、Y に理由を尋ねたところ、「F さんが、大杉神社でのお参りが終わったら霊力が高まっているので、これまで見つけられなかった近くにある磐座を、今日は見つけられると言ってはるからね」という答えが返ってきた。

F は磐座の霊気の研究をしており、隠れた磐座を探すことをライフワークにしている。「大杉神社付近に、まだ見つけていない磐座の気配は感じるものの、どうしても見つけられなかったが、この日は大祭によって霊力が上がっているので、見つけられる

³²「ありがとう」という言葉は、精神世界ではエネルギーと結びつけられることが多いが、今回 Y は特に理由を言っていなかった。

筈だ」ということだった³³。

当初筆者は、これはプログラム外の出来事かと考えていたが、Y によれば前もって F から、予定に組んでおいて欲しいと言われていたらしく、それも含めての一日のスケジュール管理をしているということだった。「大杉神社の近くにあるのに、Y さんにも分からないのですか」と尋ねたところ、Y は「人にはそれぞれ使命があるから、それ以外のことには示しが与えられないようになっている」と淡々と答え、「あの人(F) は、埋もれた磐座を見つけ出すのが使命、それがどう役に立つかは分からないけれども、自分がそれを使命と感じたらやるしかない、それを応援する」と強い口調で言った。

そこから 12~3 分林道を走った後、ガードレールの切れ間で F を乗せた車が止まったので参加者全員が一旦は降りたが、F が、「かなり危険なところにあると分かったので、体力的に自信がある人だけついてきて下さい」と言ったので、6 人だけが F についていくことになった。道とは思えない廃道(写真 7)を進んでいったところ、放置された神社と磐座があった(写真 8)。当日は猛暑日だったが F が持参した温度計で測ったところその場の温度は 15 度であった。



写真 7 筆者が撮影



写真 8 筆者が撮影

Y のサロンに戻ってきてからは、ディスカッションが行われた。最初は Y が講演会をするようなイメージをもっていたが、実際は会員がそれぞれに意見を出し合い、初参加者からの質問に対しても、Y は、「その話なら G さんの方が詳しいから」、「それは F さんに教えてもらった方が良い」と言い、Y 以外が答える場面も多くあった。

³³ F への聞き取りにもとづく(2020 年 8 月 11 日)。

大杉神社や、大杉神社と関連付けられる技法などについては Y か、Y のことをよく理解している I が答えることが多かったが、大杉神社から離れた精神世界全般の話になると、会員も初参加者もそれぞれ持っている思想や技法も違うため、「そこは違うな」という話にもなった。Y は「使命も示されることも、それぞれが違うのだから、それぞれの持ち場で答えを見つけていけば良い」と、集まった会員の思想が 1 つである必要はなく、「大杉神社を守っていく」ことについて一致できれば、それで良いとしていた。

筆者は、今回の大祭も Y の企画・立案かと考えていたが、Y は大祭を行うことを決めただけで、「ひ・ふ・み」を実現するために鹿皮太鼓を使って風の妖精を呼んだり、ヒーリング・ハーブを使って水の妖精を呼ぶなどは、G や E から企画として出てきており、また F が、大杉神社の近くには、まだまだ多くの霊的な場所があることを示したいと、今回の磐座散策を大祭の中に組み込むように言ったことなど、大祭全体を見ると Y は、大祭をすることを決め、会員の企画を組み込んでプログラムとスケジュールを作る役割を担い、大祭を会員のやってみたいことや、実現したい内容が詰め込まれたイベントに仕上げている、この協働組織の「世話人」であることを改めて確認する結果となった。

(6)変化後の世話人と会員との関係

調査を始めて約 2 年の間に、「神様ごとが好きだからやっている」と言っていた X や Y は、自らエネルギーワークやチャネリングなどの精神世界の技法も行うようになっていた。

先に記した通り、たまやでは、体験や体感を重視するようになっているが、シンギング・リンのイベントも会員の提案によるもので、X は公民館での演奏許可と、参加者全員が音浴ができるように布団の手配を中心に動いており、「体験や体感を前面に打ち出したイベントをしたい」という会員の要望が形になることを重視した結果、案内におけるワークの仕方も変化させている³⁴。たまやは、サムハラ神社に来る人々が X の影響を受け変化していったのではなく、集まる人々のニーズに合ったものを提供できるように、世話人の方が柔軟に変わっていったのである。

Y の側でも、「綿棒ピラミッド」や、「エネルギーをシャンバラに落とす」所作、「チャネリングによる祝詞の取得」、さらには「金星のエネルギーが注入されるのを体感する」、「自分だけの龍を撮影する」、「妖精を耳元で感じる」というように体験

34 X への聞き取りにもとづく(2020 年 9 月 12 日)。

や体感を重視し始める点で、X と共通する部分が多数ある。

両協働組織とも、変化の速度から考えると、世話人が強力な求心力をもって会員を牽引しているように見えるが、2 人はあくまでも世話人という立場を重視していることが、最新の調査結果から分かる。

たまやでは、先に述べた通り、会員の個人的な提案を受けて X が会場の手配や地域との調整をしており、大杉神社を守る会では、林道の整備などの大きな作業を除けば、Y がいなくとも会員が大杉神社へ行って自主的に清掃を行ったり、大祭のプログラムの中にも、会員の意見が多く反映されている。両協働組織とも、世話人の指導力や牽引力で動いているのではなく、そこに参加している会員 1 人 1 人が主体的に動いているのである。そして、彼らは、思想や技法、魂の浄化という精神世界の基本思想を持ちつつも、「その場所とそこを訪れる人のことを考えるように」なっており、個でありつつも、目的を同じくする部分においては、協働組織として一致しているのである。

(7) 地域社会と協働組織

次に、この 2 つの協働組織が、地域社会とどう関わり、どのように受けとめられているのかについて見ていく。

既に彦根市武奈町が無人となり、組織の活動を制限するものがない大杉神社を守る会に対して、たまやの活動中心地であるサムハラ神社奥宮は、ここを統括管理している大阪市のサムハラ神社、奥宮の管理者、そして金刀比羅神社の総代との関係も重要になっている。

大阪市のサムハラ神社の宮司 J(40 代 男性)は、たまやの活動について、「本来の参拝方法と違う」とあまり快く思っていないようであったが、西日本豪雨の際に、多額の修繕費用がたまやから拠出されていることもあり、その活動を黙認せざるを得ないようであった³⁵。一方、奥宮の管理者 K は、たまやの活動開始時には、「勝手におかしな参拝方法を教えている」と否定的であったが、御朱印を求めて管理者を訪ねてくる人や、サムハラ神社自体へ参拝者が増えていることなどについては、「神様に対する捉え方は違うが、大切にする部分は同じ。周囲への配慮をしてくれれば自分流の参拝方法でも良い」と、その存在を認める方向にある(2019 年 7 月 28 日 K への聞き取り)。さらに金刀比羅神社の総代 L(70 代 男性)は、神社(金刀比羅神社も含めて)の施設復興や、多くの人々がサムハラ神社を訪れることによって、金刀比羅神社への参拝者

³⁵ J への聞き取りにもとづく(2019 年 7 月 15 日)。

も桁数が変わったこと、大阪市内のサムハラ神社の指輪に替わるグッズとして、たまやがサムハラ神社に納めている銀杏袋にも言及し³⁶、「神社はもともとパワーがあるところなので、パワースポットには違いはない」とその参拝方法や案内の仕方にも賛同をしているようであった(2019年7月28日Lへの聞き取り)。

神社以外の地域社会との関係について見ていくと、サムハラ神社の近辺には宿泊施設や食堂、商店などがいくつか存在するが、雑誌に取りあげられるような地域になったこと、観光協会での扱い、売り上げがあがっているという経済的効果、そしてXや会員がサムハラ神社を定期的に見回ることにより、環境が綺麗に保たれていること等から、彼らは概ね好意的に受け入れられている³⁷。

これに対して、大杉神社を守る会は、この協働組織の存在自体を知っている人が少ないため、地域社会からの受け入れという点においては、たまやに比べて大きな反響があるわけではない。しかし地道な植樹活動や、雨天や積雪時でも行われている林道の整備、安全なルートへの看板の設置などの活動は、周辺集落へ行く人々や林業従事者から評価されており、少しずつではあるが認知度はあがっている。ただ、この点についてYは、「生業として毎日ここに携わっている林業の人たちの方が立派だ」と言う(2020年8月11日Yへの聞き取り)。これは「自分が賞賛されると魂のレベルが落ちる」というYの見解による部分もあるが、このようなYの姿勢も好意的に見られる要因と言える。近隣住民の話では、大杉神社への経路途中にある食事処では、時折会員と地域の人が話をする光景も見られるということであった³⁸。

おわりに

これまでの現地調査から、「なぜ彼らが協働するに至ったのか」、「なぜ地域社会から受け入れられつつあるのか」について、それぞれ2点の手がかりを示したい。

「なぜ協働するに至ったか」についての1つめは、XやYといった核となる「地元の世話人」の存在である。パワースポットと呼ばれる場所は各所に存在するが、多くの精神世界関係者が訪問していても、そこに協働組織は育っていない。

XやYのように、精神世界関係者を受け入れ、活動を共にする核となる存在があっ

36 KとLは2人で大阪市のサムハラ神社へ指輪を卸してもらいに行ったが断られている(Lへの聞き取りにもとづく、2019年7月28日)。

37 加茂町住民らへの聞き取りにもとづく(2019年7月28日)。

38 近隣住民(50代 男性)への聞き取りにもとづく(2020年4月8日)。

たからこそ、「個人的に神秘体験を探求する人々によるゆるやかなつながり」(三木 2014 : 47)ができ、目的や課題を共有し活動することで、横のつながりも広がっていった。

2 つめは、「世話人側」の精神世界に対する寛容な態度である。彼らは、「神様ごとが大切」として、どのような形にせよ、その土地の神に対する信仰をもっており、「日本の宗教文化の古層をなすアニミズムとシャーマニズムと祖先崇拝を保存」している民俗宗教的な信仰(塩原 1994 : 86)を持っているということができ、精神世界を受け入れやすい状態にあったといえる。つまり世話人にとっての精神世界の技法やワークショップは、「神様ごと」の延長線上にあり、集まってきている人に、できる限りのものを提供しようとした結果、世話人側が精神世界寄りに変化していったことができるのである。これら 2 つが霊性にかかわる協働組織が成立するに至った理由として考えられるのである。

次に「なぜ地域社会から受け入れられつつあるのか」についての 1 点目は、大杉神社で行われた大祭において(2020 年 8 月 11 日現地調査)、兵庫県や大阪府、福井県から大祭に参加するために Y の店舗前に集まった人たちに対する「お参りご苦労さまやね」という店舗付近の住民(40 代 女性)の言葉に現れている。個々の参拝者は何度訪れても「1 参拝者」の域をでない。しかし、地元の世話人の元に集う人々は、その地域において目立つ存在となり、地域社会に根ざした信者集団のように見えたとしても何ら不思議ではない。

精神世界は「脱宗教」の意味で掲げられた言葉であり、Y も「自分たちは宗教ではないし、信者でもない」とは言う³⁹。しかし地域社会から見れば、彼らは神社に参拝しに集まった信者集団なのである。これはたまやにおいても、サムハラ神社の管理者が、たまやの会員を「信者さんら」と呼ぶことから同じといえる(2020 年 8 月 7 日 K への聞き取り)。霊性にかかわる協働組織を構成する人の内面が「個人的な神秘体験の探求」であったとしても、地域社会からは、信者の集まりとして見られているのである。

そして 2 点目は、世話人がその地域に根ざした人物であったことによる。世話人と地域社会との関係が上手くいっていなければ、公民館を借りて演奏をしたり、20 人分の布団を持ち込むなどは不可能である。世話人が地域社会に根ざした者であるゆえに、そこに集まってくる人が異質に映ったとしても排除されない点もまた、彼らが地域から受け入れられる要素となっているのである。

今回とりあげた事例に限っていえば、現在のところ彼らは、神社の信者集団の 1 つ

39 Y への聞き取りにもとづく(2020 年 8 月 11 日)。

として見られている。つまり宗教とは別のものを求めた人々が、集まった結果として、逆に宗教との境界線が曖昧になり、地域社会から信者集団として見られるようになった 1 例だということができよう。またこのことは、今後、「霊性をあつかう協働組織」と宗教団体について考える際の指標となり得るだろう。

参考文献

- 一柳廣孝 1997『催眠術の日本近代』(青弓社)
石川雄一 2019『心を救うことはできるのか』(サンガ)
伊藤耕一郎 2020「精神世界を問い直す」『千里山文学論集 第 100 号』(関西大学大学院文学研究科)
大田俊寛 2013『現代オカルトの根源』(ちくま新書)
大道晴香「パワースポットのメンタリティ」山中弘 編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』(弘文堂)
岡崎梓織 2018「滋賀県における民俗宗教的聖地の展開」(滋賀県立大学 地域文化学科 市川研究室 平成 29 年度卒業論文)
小笠原英晃 2019『精神世界の歩き方』(BAB ジャパン)
岡本亮輔 2014『聖地巡礼』Kindle 版(中公新書)
岡本亮輔 2020「ジェネリック宗教試論」山中弘 編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』(弘文堂)
榎尾直樹 2010『スピリチュアリティ革命』(春秋社)
門田岳久 2013『巡礼ツーリズムの民俗誌』(森話社)
門田岳久 室井康成 2014『"人"に向き合う民俗学』(森話社)
桑山敬己 島村恭則 鈴木慎一郎 2019『文化人類学と現代民俗学』(風響社)
北川隆三郎 2000「精神世界ブームの気になる歴史」『精神世界が見えてくる』(サンマーク出版)
斉藤一人 2012『上機嫌の魔法』(KKロングセラーズ)
塩原勉 1994『転換する日本社会』(新曜社)
島藺進 1992『新新宗教と宗教ブーム』(岩波ブックレット)
島藺進 1996『精神世界のゆくえ』(東京堂出版)
島藺進 2007a『スピリチュアリティの興隆』(岩波書店)
島藺進 2007b『精神世界のゆくえ』(秋山書店)

哲学 39 号 (2021)

レイチェル・ストーム 高橋巖、小杉英子(訳) 1993『ニューエイジの歴史と現在』(角川選書)

高津理恵 2008『幸せな奇跡』(PHP研究所)

武井元晃 2019「眼前にある課題群」『日本民俗学 300 号』(日本民族学会)。

はせくらみゆき 2017『宇宙とあっさりつながる最強のワークブック』(かんき出版)

半田広宣 中山康直 2014『反転の想像空間 シリウス次元への突入』(ヒカルランド)

船井幸雄 2005『人は生まれ変わる』(ダイヤモンド社)

堀江宗正 2019『ポップスピリチュアリティ』(岩波書店)

光田秀 2010『賢者たちのメッセージ』(PHP 文庫)

三木英 2014『宗教集団の社会学』(北海道大学出版)

吉永進一 2010「近代日本における神智学思想の歴史」『宗教研究 84 卷 2 葺』(日本宗教学会)